

No. 76

## [ SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT ]



### 土佐闘犬

### ●目次●

住吉大社境内の石燈籠 ・・・・・・・・・・・・・・黒田 一充	2
二尊院の「素庵夫妻の墓」と『大覚寺文書』収載の『角倉與一(素庵)書状』について	
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・林 進	4
イスラエル国 テル・レヘシュ遺跡でみつかったシナゴーグ・・・・山内 紀嗣	8
本山考古室と紅野芳雄「考古小録」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
三島ウドの栽培方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・吉野なつこ	12
遠山慶一氏寄贈の「遠山甚二郎旗指物」について ・・・・・・上原 康生 二	14

### 関西大学博物館

## 住吉大社境内の石燈籠

### 黒 田 一 充

神社や寺院の境内を歩くと、石燈籠を目にすることが多い。石面には文字が刻まれているが、目にした人がわざわざ立ち止まって文字を読むことは、ほとんどないのではないだろうか。

大阪市住吉区の住吉大社は、海に面して社殿が建てられているため西側が正面になり、国道に面して石燈籠が立ち並んでいる[写真1]。

寛永21年(1644)が現存する最古の石燈籠の ため、それほどの古さはない。しかし、同社の 石燈籠が興味深いのは、その銘文に刻まれた文 字の情報である。

住吉神は海の神としての信仰があつく、古代

の遣唐使派遣の 際にもその安全 を祈った。次第 に和歌の神、文 学の神としてが、 信仰も集めたが、 て海上交通路が



写真 1 境内正面側の石燈籠

整備され、船で物資を運ぶことが盛んになると、 さまざまな業種仲間や全国各地の取引先の商人、 船主などが、航海の安全を祈って共同で住吉社 に石燈籠を寄進するようになる。

そのため、石燈籠の石面に刻まれた年代、地名、 商人名などを分析すると、当時繁昌していた業 種や、どこの土地の商人と取引していたのかが わかってくる。

個別の紹介はこれまでもあるが、全体の調査は平成になってからは初めてのことであり、住吉大社の境内と周辺参道の636基、境外末社の港住吉神社(大阪市港区)と宿院頓宮(堺市堺区)の計22基を確認して、銘文の解析を進めている(数は、2017年12月現在)。

造立年代がわかるものから、鉄道網の発達で物資の輸送が船から切り替わっていく明治末までの539基を抜き出して分析してみたい。

石燈籠の奉納数を年号別に一覧表にしたのが 表1の青色の棒グラフだが、享保年間(1716~ 36)が一番多く、寛政・天保年間にも山があり、ついで明治が多いことがわかる。

高さは、簡易測量のため正確さに欠けるが、 8メートル前後のものが6基ある。ただし、これらは最初から高く造られたものではなく、後になって石壇が追加されている。これが住吉大社の石燈籠の特徴でもある。

石燈籠というと造立当時のまま現在も残っていると思いがちだが、住吉の場合は海浜に近く、年月がたつと次第に風化して、倒壊の危険性が出てくる。そのたびに最初に寄進した業種仲間の後継者たちが修繕や再建の費用を工面し、その記念に燈籠の基壇を追加して名前を刻んでいったのである。

写真2は、そのひとつの宝暦12年(1762)に 大坂・京都・江戸の翫物商が住吉講を組織して 寄進した石燈籠で、反橋を渡った左右にある。 翫物はおもちゃのことで、これまで5回改修や 再建が繰り返され、基壇が増えて高くなってい る。一番下の基壇は平成3年(1991)の改修時 のもので、大阪の玩具商が中心となったが、大 阪に支店を持つ有名企業も名を連ねている。

表1のオレンジ色の棒グラフは、基壇に刻まれた修繕・再建年代を加えてみた。文化年間の新規は少ないが、一方で修繕が増えている。文化7年(1810)に遷宮があったため、銘文に名

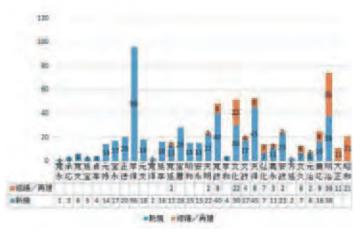


表1 年号別の奉納数と修繕・再建数





写真2 翫物商寄進の石燈籠 写真3 吉文字屋寄進の石燈籠前のある取次とよばれた神主たちが資金集めに修繕を勧めたのだろう。

基壇に銘文が残るもの以外にも、実際はもっと多くの石燈籠が修繕や再建されたようである。本宮正面の角鳥居前にある享保20年(1735)に吉文字屋が寄進した燈籠は、銘文を池大雅が書いたとされているが [写真3]、池大雅は享保8年生まれで安永5年(1776)に没したため、晩年に近い時期に再建されたと思われる。

北枚橋東側にある寛政11年(1799)北国積木 綿屋中寄進の石燈籠の基壇には、銭屋喜助ほか 3名の名前がある [写真4]。これは加賀金沢 の船主・銭屋五兵衛配下の船頭らと一致する。 ただし、彼らは天保12年(1841)ごろには船頭 になっていたことがわかっており、そのころの 再建だと思われる。

銘文の年代から推定すると、造立して50~60年ぐらいたつと修繕や再建の必要が生じたようで、境内に現存する石燈籠で、当初のまま残っているものは少ないのかもしれない。位置についても、昭和4~6年(1929~31)ごろの境内整備で裏側にあった石燈籠を正面側に移動しており、それ以前の位置はよくわからない。

石燈籠の寄進者を職種で分けると、船舶名・ 廻船・荷主などの海上輸送と河川輸送関係が半 数で、海産物、農産物関係が続く。住友家のよ



写真 4 北国積木綿屋中寄進の石燈籠

うに個人で寄進 したものは引先とうが、仲間で資金を集めの文書も各 地に残っており、設計図と寄付の目標額が記されている。

銘文の地名を国別に数えていくと、大坂・堺 (摂河泉を含む)と京都が約57パーセントを占めている。この人たちが住吉社への燈籠の寄進を呼びかけ、各地の取引商人たちがそれに応じたことを意味している。北は松前から南は薩摩まで広がっており、それらを地図の上に示したのが図1である。信濃・甲斐などの内陸部が含まれないのは理解できるが、山陰地方が空白になっているのが目立つ。これは、遠隔地にいる取引先との寄進が原則のため、廻船の立寄地の商人が参加することはほとんどなかったのと、京・大坂への物資の輸送は、越前敦賀から琵琶湖へ抜けるルートが使われたことによるのかもしれない。

北陸については、加賀の銭屋のほかにも、越 前河野浦の右近権左衛門、中村三郎右衛門の名 前があり、今後の分析でさらに個人が特定され るようになると、空白地が埋まっていくだろう。

また、住吉大社の石燈籠と対応する形で、取 引先商人たちが居住地の氏神社にも石燈籠を造った事例を、徳島市の金刀比羅神社や富山県高 岡市の関野神社で確認しており、今後さらに類 例が増えていくと思われる。



図1 銘文の地名からみた奉納者の居住地

本研究は、サントリー文化財団の研究助成 (2015年度、2016年度)の研究成果の一部である。

文学部教授

# 二尊院の「素庵夫妻の墓」と『大覚寺文書』収載の 『角倉與一(素庵)書状』について

林進

角倉素庵(1571~1632)は、近世初期、朱印船による安南(ベトナム)貿易、保津川や〈京都〉高瀬川運河などの河川開鑿事業に多大な業績を残した京都の実業家である。いっぽう生涯、藤原惺窩門の儒学者でもあった。本姓は吉田、名は与一、諱は玄之(はるゆき)、のち貞順、字は子元、号は期遠、西山、元和五年(1619)に隠居し素庵と号した。素庵は晩年、寛永四年(1627)に洛西・嵯峨の家を出て、清涼寺の西隣に隠棲し、寛永九年(1632)六月二十二日に没した。享年六十二。

嵐山にある千光寺大悲閣所蔵の『吉田子元(素 庵)行状木碑』(堀杏庵撰文、寛永十年四月建碑) には、「同壬申(寛永九年)三月、公(素庵) は病に臥す、門人(和田)宗充を召し、訓戒を 作りて二子(注:京角倉初代の玄紀、嵯峨角倉 初代の厳昭)に遣して曰く、我死すれば、則ち 西山の麓に葬り、〈貞子元之墓〉と書せと云う、 地理の書、風水の術、兼学を以っての故なり」(原 文は漢文)とある。

素庵は晩年に患った悪疾(ハンセン病)が家名を汚したとの思いから、菩提寺である〈嵯峨〉二尊院の吉田・角倉家の墓所に葬られるのではなく、奥嵯峨の「西山」(小倉山のこと)の麓、中世以来の無常所「化野」(あだしの)に葬られることを希望した。中国・朝鮮で古からおこ

なわれた《風水地理》の思想、すなわち良き墳墓を得れば、死者は長く幸を受け、その子孫は長く繁栄する、という説に基づいてのことである。寛政(1789~1800)の頃に編纂された『角倉玄匡系譜』、『寛政重修諸家譜』には、その墳墓は「化野平山」にあると記されている。素庵の遺命によって建てられた「貞子元之墓」は今も、そこに立っている(写真1)。

素庵没後、角倉一族は素庵という人間をどの ように見ていたのか。

現在、二尊院の吉田・角倉一族の墓所には、 墓石群中央の基壇上に「角倉了以夫妻(素庵の 両親)の墓」(左の二基)と「素庵夫妻の墓」(右 の二基)の四基が並んである(写真2)。

嵯峨角倉末裔の吉田周平氏(奈良県三郷町)によれば、素庵の長子玄紀から八代後の與一玄 匡の奥方が文政三年(1820)八月十九日に死去 した後に作成された京角倉墓の絵図面には了以 夫妻、素庵夫妻の四基の墓が記されており、現 行通りである。しかし文化十年(1813)に「了 以翁二百回忌」があったが、「素庵貞子元」の 墓が新たに造られたという記述は今のところ見 当たらない。文化四年(1807)六月、二尊院廟 所について記した西(嵯峨)角倉の調書がある が、それにも素庵の墓についての記載がない。 文化四年の時点では、「素庵貞子元」の墓は二



写真 1 角倉素庵の墓 〈嵯峨〉化野平山 銘「貞子元之墓 子元吉田素庵/之字也諱順」



写真 2 角倉了以夫妻の墓(左)、素庵夫妻の墓(右) 〈嵯峨〉二尊院

尊院になかったのではないか、と吉田氏は考えている。素庵の墓が二尊院の墓所に新たに造立された時期や経緯は、いまだ不明である。

\*

嵯峨にある門跡寺院・大覚寺に伝来した文書を集成した『大覚寺文書』(上下巻・二冊、大 覚寺史資料編纂室編、大覚寺発行、昭和五十五 年〈1980〉)のうち、上巻に『井法橋宛 角倉與 一(素庵)書状』一通が収載されている。

『大覚寺文書』の編集委員は、〈代表〉中村直 勝、林屋辰三郎、足立雅子、川嶋将生、下坂守 の五氏で、いずれの方も日本史学、古文書学の 碩学である。すべての文書には釈文がつけられ ている。上巻には大覚寺所蔵文書のうち、寺務 に関する文書と、元大覚寺坊官の井関家伝来の 「井関家文書」、および尊経閣文庫所蔵の「大覚 寺文書」が収録されている。他所の文書を収載 した理由は、寺史を明らかにする上で、重要な 史料であるからだとしている。文書は慶長(1596 ~1614) 末年以前のものを収録したという。な お下巻には大覚寺所蔵文書のうち、江戸時代の 書状類が収録されている。上巻収載の当該『井 法橋宛 角倉與一書状』は「井関家文書」のう ちの一通である。図版は掲載されていない。つ ぎに本書状の釈文を記す。

昨日之御状、他 行仕候而、今 朝拝見申候、仍 孟子之此の事、 承候、此方ニハ 孟子ハ無之候、 中庸と孝経と 両冊候、但壹度 上申候、此の事ニ候哉、 不存候間、先一筆 如此候、御報 待申候、恐惶頓首、 吉與一(花押)

廿三日

井法橋 人々御中

宛名の「井法橋」の「井」とは、大覚寺の寺 務を司った坊官家の筆頭である井関氏の略した 言い方で、中国風の呼称である。法橋は法印(極位)、法眼につぐ三番目の僧位で、名家では比較的若い年齢のときに叙せられる。本来、「井関殿」「井関法眼殿」のように敬称をつけるのが慣わしであるが、ここでは簡略な書き方をしているので、井法橋と素庵の二人は親しい間柄で、同年配かと思われる。とすれば、井法橋は井関性慶(法印宮内卿、寛永六年〈1629〉六月十七日没)のことと推察される。

大覚寺坊官の下位に属し、同じく寺務を司る家を「家士」という。角倉宗家の土倉業・角倉栄可(了以の従弟)の系統がこの家士にあたる。素庵が井関法橋と親しい関係をもっていたのは、そういう事情があったからだ。本書状の内容は、つぎの通りである。

「昨日頂戴しましたお手紙、他所に用事で参っておりましたので、今朝、拝見いたしました。 『孟子』(「四書」の一つ、他に『大学』『中庸』『論語』がある)のこと、承りました。当方には、現在、『孟子』は在庫しておりません。『中庸』と『孝経(古文孝経のこと)』(経書の一つ)の両冊は在庫しています。ご要望の『孟子』は、いま一度、本に仕上げます。これでよろしいでしょうか。当該本がございませんので、とり急ぎ、手紙にてお知らせいたします。『孟子』が出来上がり次第、お知らせいたしますので、しばらくお待ちください」。

この書状から、素庵が嵯峨の古活字版印刷・ 製本工房のごく近くに居住していたことがはじ めて明らかになった。

井関法橋より『孟子』一部の注文を受けた素 庵は、自身が経営する角倉邸内の印刷・製本工 房において、『孟子』の《不足分の丁》(一丁は 二頁)を調べ、その不足分について新たに木活 字を植字し、摺刷し、その《摺刷分の丁》を《既 存分の丁》に合わせ、製本するように配下の職 人に指示した。

工房の製本部屋の整理棚には漢籍ごとに、すでに摺刷してあった各丁が順番に置かれており、新たに摺刷された丁は、いわゆる「異版」として整理棚に収納されたと推測される。

この『素庵書状』にある『孟子』『中庸』は『大学』『論語』の二書を合わせ「四書」として、同じ版式、同じ活字で印刷された、いわゆる《合刻本》と思われる。

宮内庁書陵部所蔵の古活字版『(漢趙岐注) 孟子』(全十四巻・七冊、《下村生蔵刊本》とされる)は、第一冊46丁、第二冊41丁、第三冊40丁、第四冊39丁、第五冊38丁、第六冊40丁、第七冊45丁、合計289丁であり、「四書」「五経」のなかでも大部な本に属する(高木浩明「古活字版悉皆調査目録稿(八)」『書籍文化史』第18集、2017年)。一丁ずつ植字、摺刷、解版をくり返す古活字版の印刷工程は、増刷が容易な整版(木版印刷)と違って、たいへんな労力と時間を必要とする。古活字版の増刷の場合、不足分の丁がどれだけあるかが本の製作日数を決める。

さて、素庵の叔父である吉田宗恂(慶長十五年没、1558~1610)は、意庵と号した医師であり、藤原惺窩の門人でもある。父は天龍寺妙智院三世・策彦周良に従って二度入明した名医宗桂、兄は了以である。彼は蔵書家として知られ、文庫名を「称意館」(父宗桂の文庫を継承する)といった。宗恂は文禄(1592~1595)末年から慶長(1596~1614)前半、開版事業に素庵とともに深く携わっていた人物である。

慶長三年(1598)二月二十一日、公家の山科 言経(やましな・ときつぐ)は知友の意庵(宗 恂)のもとへ出向き、『大学』『中庸』『孟子』 の《注本》(付注本、注釈本のこと)を息子阿 茶丸のために購求した。この三本は《新作》(新 刻)の「一字ハン〈板〉」(古活字版のこと)で あると特記している。この購求には内々の約束 があったという(『言経卿記』)。





写真 3 『論語(論語集解)』(吉田宗恂旧蔵)宮内庁書陵部蔵 〔匡郭は四周双辺、(序) 21.6×15.2糎〕

言経から新刻の付注本『大学』『中庸』『孟子』の話を聞いた興正寺昭玄は、自分もその三本を購入したく思い、言経にその仲介を依頼した。しかし言経自身も注文しているので、四月二十二日に二人の共通の友人である京の医師寿命院秦宗巴にその仲介を頼んだ。宗巴は意庵の友人であり、宗巴の著作『徒然草寿命院抄』(慶長六年の中院通勝の跋文がある)は慶長九年(1604)に如庵宗乾によって刊行された。宗乾は意庵の仮名と考えられる(森上修「初期古活字版の印行者について一嵯峨の角倉(吉田)素庵をめぐって一」『ビブリア』第100号、1993年、天理大学附属天理図書館)。

五月十三日に昭玄分の書籍代銀子十二匁は、 宗巴を介して意庵に支払われた。いっぽう、同 日に言経は意庵邸に行き、直接阿茶丸分の銀子 十二匁を支払った。その後、言経は意庵に新刻 の『論語』を注文し、九月に受け取った(『言 経卿記』)。結局、言経は意庵から新刻の付注本 「四書」を購入したことになる。

ところで、慶応義塾図書館所蔵の『中庸(中庸章句)』は、「中庸」の末に「補音釈」を一丁附載し、その裏葉第七行左下に「下村生蔵刊」の刊記を有している。この下村生蔵刊『中庸』の表紙は淡茶色表紙原装、25.9×19.3糎。四周双辺有界、毎半葉七行十七字、注小字双行、匡郭内(21.7×15.9糎)。版心は双花口魚尾で白口、中縫に「中庸章句、丁付」とある。活字の大きさは縦1.2糎、横1.4糎、小字が縦約1.1糎、横0.6糎である。活字の字様は丸味を帯びた大振りの落ちついた感じの字形である。活字書体は、朝鮮銅活字のうち、1434年(甲寅)に作成された、いわゆる《甲寅字》に共通する特徴をもっている(川瀬一馬『新修成簣堂文庫善本書目』1992年、お茶の水図書館)。

この下村生蔵刊『中庸(中庸章句)』と同じ版式、同じ活字で印刷されている宮内庁書陵部所蔵の無刊記本『論語(論語集解)』(写真3)も、下村生蔵が刊行したものと考えられる。この書陵部本には白文方印「吉家/氏蔵」の印章が捺されている。同じ版本の西尾市・岩瀬文庫の『論語』にも同じ印章が捺されている。この印章は宗恂の蔵書印である。宗恂が同じ『論語』を二本架蔵しているので、彼はその出版に関与した人と考えられる。下村生蔵刊『中庸』(慶大本

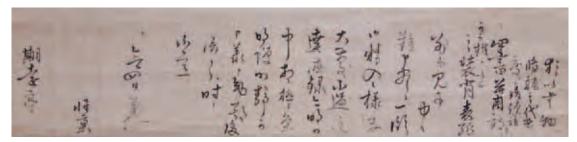


写真 4 『期遠亭(素庵)宛 藤原惺窩(惺斎)書状』 個人蔵

ほか、二本)と同じ版式、同じ活字の無刊記本 『論語』(書陵部本、岩瀬文庫本ほか、三本)以 外に、同じ版式・活字の無刊記本『(漢趙岐注) 孟子』(書陵部本、東洋文庫本ほか、八本)、同 『大学(大学章句)』(二本)が現存している。 これらは《合刻本》であり、《下村生蔵刊本》 とよばれる(高橋智「慶長刊大学中庸章句の研 究」『斯道文庫論集』第32号、1998年)。

言経が意庵に注文した新刻の付注本「四書」、 すなわち『大学章句』『中庸章句』『論語集解』『(漢 趙岐注)孟子』は、前述の《下村生蔵刊本》の「四 書」に相当するものと推察される。この「四書」 は、宗恂の甥である素庵が嵯峨の印刷・製本工 房において刊行したものであろう。

素庵が慶長十四年(1609)に刊行した《嵯峨 本》古活字版『伊勢物語聞書(肖聞抄)』(国立 国会図書館蔵)の中巻、後表紙の裏貼りの中か ら、下村生蔵刊の古活字版『元亨釈書』(慶長 十年刊)の《刷り破(や)れ》(印刷の反故紙)半葉 が発見された。また、大東急記念文庫蔵本の中 からも、同種の反故紙が見出された。そうする と、生蔵は《嵯峨本》の出版に関係した人物と いうことになる。おそらく素庵と生蔵の二人は 古活字版の漢籍・医書・仏書、および古活字 版・整版の《嵯峨本》を出版した共同制作者と 考えられる。生蔵は素庵より嵯峨の印刷・製本 工房の職人たちを統括する責任を任されていた 人物ではないか。前述の慶応義塾図書館本『中 庸』にある「下村生蔵刊」の刊記は出版物の《刊 記》ではなく、工房における印刷責任者の《証 し》のようなものであろう。素庵は出版物の刊 記や奥書にいっさい名前を記していない。素庵 は自己の業績を誇示することを欲しないという 老子の思想をもっていた人ではなかったか。

新出史料『期遠亭(素庵)宛 藤原惺窩書状』(個 人蔵、写真4) には「(素庵から贈呈された) 四書並周詩之装背表紙、別而見事」の文言がある。よって、わたしは素庵が慶長四年(1599)頃に古活字版「四書」、『周詩(詩経、毛詩)』(五経の一つ)を刊行し、自ら表紙の装訂をおこなっていた事実を指摘した(拙論「角倉素庵とキリシタン版・古活字版・嵯峨本」、豊島正之編著『キリシタンと出版』所収、2013年、八木書店)。その内容は前述の意庵の「四書」と関係し、『井法橋宛 角倉與一書状』に通じる。

慶長の前半、嵯峨の印刷・製本工房では、古活字版による漢籍や大部な中国史書『史記』(袋綴装、大本、有界八行本、百三十巻・五十冊、国立公文書館内閣文庫本ほか多数現存)などが刊行された。それと並行して、漢字に平仮名を交えて印刷する国書の《嵯峨本》の出版が準備されていた。そして慶長八年(1603)以前に、美麗な装訂になる最初の《嵯峨本》、古活字版『徒然草』(袋綴装、上下二巻・二冊、雁皮の本文料紙には紫苑模様などの雲母刷文様が施されている。写真5)が刊行された(小秋元段「嵯峨本『史記』の書誌的考察」『太平記と古活字版の時代』所収、2006年、新典社)。



写真 5 嵯峨本『徒然草』 個人蔵

元大和文華館学芸員 大手前大学非常勤講師

# イスラエル国 テル・レヘシュ遺跡でみつかった シナゴーグ

### 山内紀嗣

#### 1 はじめに

テル・レヘシュ遺跡はイスラエルの北部であるガリラヤ地域にある遺跡(図1)で、前期青銅器時代からローマ時代にいたるテル型の遺跡である(写真1)。



図1 レヘシュの位置



写真1 レヘシュ遺跡(西より)

テルの大きさは長さ約400m、幅約250mあり、 北東から南東にやや細長い。頂上部には約80m 四方の平坦地があり、この地区が重要な場所で あることは想像できた。また地表には石列が露 出している部分もあり、周囲に落ちている土器 片などから石列はローマ時代のものであることはわかっていた。

この遺跡の調査は2004年から始め、昨年で第 12次調査になる。遺跡の規模が大きいこともあ り、毎年少しずつ調査面積を広げているのであ る。

2016年夏は頂上部平坦地南部分でみつかっていた後期鉄器時代(B.C.6~5世紀頃)の大型複合建物の規模を確認する調査を行なっていた。この建物はバビロニアあるいはペルシャに支配されていた時期のもので、その様子を確かめようと考えていた。その発掘の折にローマ時代の建物がみつかったのである。ローマ時代のレヘシュは小さな村落で、オリーブ栽培などの農業をしながらユダヤ教に則った生活を送っていたことがわかっていた。

建物は壁の内側に長方形の切石を並べたものであり、シナゴーグ跡とわかった。2016年は建物の調査期間の問題もあり、その西側半分しか発掘できていなかったが、2017年に東側半分を掘り、全貌が解明できたのである。

#### 2 シナゴーグの構造(写真2)

建物の南北壁の方向は北から28度東に振れている。平面形は正方形に近い。南北8.5m、東西9.3mある。壁の厚さは場所によってやや異



写真2 みつかったシナゴーグ跡(上が北)

なるが約80cm ある。建物の入り口は北側の辺の中央にあることがわかった。

このあたりはテルの頂部ではあるが、石灰岩の岩盤が露出しており、壁は直接岩盤の上に設置されている部分もある。四周の壁は20~40cmの礫を用いて基礎を構築したもので、上部には当然日干し煉瓦の壁があったであろう。北辺の中央には壁の基礎列が無いかわりにかまち石が置かれ、入り口とわかる。入り口にはドアのストッパーとみられる石材の断片が残っていた。また、四周の壁の入り口部分を除く全てに、壁の内に沿って石灰岩製の切石が置かれていた。この切石は幅約40cm、長さ50~80cm あり、内側に露出する面をそろえて上面もほぼ平坦になるようにそろえていた。これらの切石がシナゴーグのベンチになるのである。

部屋の中央近くには2個の石灰岩製切石が置かれている。西側のものの下面は建物の地盤である石灰岩製の岩盤の上に直接置かれているが、東側については下面は土の上である。この2個の切石は当初、トウラー(ユダヤ教の律法書)などを置く台とも考えたが、両者がほぼ中央に東西位置し、建物の棟のあったとみられる場所であることから、屋根を支える柱の基礎と考える。

建物の床面にはシナゴーグが建設される前の 岩盤などをくり抜いた貯蔵穴などがあった。

床面からはガラス容器の破片や土器類が出土している。まだ整理が完全に終了したわけではないが、注目すべきものにランプの断片がある。ランプは数個出土しており、紀元後1世紀のものであることは確実である。ランプには黒灰色で緻密な粘土を用いたものがあり、当時のエルサレム地域で製作されたものである。また、建



写真3 石製カップ

物の内外から石灰岩をくり抜いて製作したカップの破片(写真3)が出土している。石製のカップはユダヤ教の儀式に用いるものである。

#### 4 みつかったシナゴーグの意義

建物は壁の内側に座るためのベンチが並べられているところから、ユダヤ教の集会所であるシナゴーグであることは間違いない。また、シナゴーグの南東20m付近には石を階段状に並べ、表面をプラスター(石灰)で塗り固めた施設がみつかっている。これがユダヤ教のミクヴェ(体を清めるためのミソギの施設)へ降りる階段であるならばまさにユダヤ人のための施設であったことがわかる。

この時期のユダヤ教の神殿はエルサレムにある。その神殿に集まることのできない者はそれぞれの地域で、神殿に代わるシナゴーグに集まり、律法を朗読し教義などを学ぶのである。

イエスの生きていた紀元1世紀前半のシナゴーグはイスラエル国内ではこれまで7例しかなく、そのうちガリラヤ地域ではわずか2例しかない。1つはガリラヤ湖西岸のミグダル(マグダラ)である。ミグダルはイエスに従ったマグダラのマリアの出身地ともされている町であった。

ユダヤ教徒であったナザレ(ナザレはミグダルの西約10kmにある町)のイエスはユダヤ教の安息日にはシナゴーグへ行き、人々に教えや奇跡的な癒しを話して回ったらしい。イエスの活動の大部分はガリラヤ南東部のガリラヤ湖周辺で行なったということであるから、テル・レヘシュ遺跡のある下ガリラヤ地域も含まれる。そうだとすれば、このシナゴーグにもイエスが来訪して教えを説いた可能性がある。

テル・レヘシュ遺跡でみつかったシナゴーグの規模は小型ではあるが、重要な意味のある建物である。将来的には遺跡を修復し、見学できる施設として復元できたら良いのだが。

#### [参考文献]

- ・F・G・ヒュッテンマイスター、H・ブレードホルン(山 野貴彦訳)『古代のシナゴーグ』 2012年 教文館
- ・山野貴彦「新約時代におけるパレスチナのシナゴーグ」 『考古学から見た聖書の世界』2014年 聖公会出版

関西大学非常勤講師

## 本山考古室と紅野芳雄「考古小録」

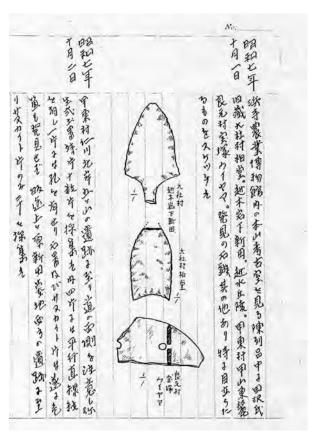
### 合 田 茂 伸

兵庫県西宮市の指定有形文化財に考古資料「考古小録及び関係品(306点)」がある。指定は平成22年5月12日である。紅野芳雄は『考古小録』の著者である。指定文化財となっている「関係品」の大部分は、氏が採集した石器である。指定対象のうちわけは、稿本「考古小録」第1冊、第2冊、第3冊、稿本「考古図譜」、稿本「考古雑録」、刊本『考古小録』、日記(3点)、採集遺物357点である。



稿本「考古小録」(全3冊)

紅野芳雄は、西宮町長に就いた紅野太郎の長 男として明治26年西宮に生まれ、明治44年茨木 中学校を卒業し、浪速銀行西宮支店に勤務した 後、大正8年から昭和13年まで家業である酒造 業の経営にあたった。なお、浪速銀行は、第 三十二国立銀行が明治31年に私立銀行として営 業した銀行で、浪速銀行と改称後大正9年に 十五銀行に合併されるまで続いた。芳雄が、銀 行勤務や家業を営みながら、大正6年から昭和 13年まで、遺跡踏査活動や、考古学に関する覚 え書きなどを連綿と記録し続けたノートが「考 古小録」全3冊である。このノートを、紅野芳 雄、吉井良尚、田澤金吾らが興した後一時中断 していた西宮史談会を昭和15年に復活するに際 して、田岡香逸らが中心となって一冊の本にま とめたものが、『紅野芳雄遺著 考古小録』で ある。



「考古小録」(昭和7年10月1日)

紅野芳雄は、遺跡の踏査や遺物の採集とその 記録に情熱を傾けたが、各地の博物館や博覧会 を見学したり、所属した西宮史談会主催の考古 博覧会や武庫地方郷土史料展覧会などへ所蔵品 の出品をしたりもしている。

大正6年に宝塚新温泉で開かれた宮川氏所蔵加茂遺跡発見石器土器の展覧会、大正8年11月30日奈良帝室博物館、大正9年2月12日、同13日東京帝室博物館、昭和7年10月1日濱寺農業博物館内の本山考古室の見学などにおいて、多くの遺物のスケッチを残している。本山考古室の遺物は、いうまでもなく、現関西大学博物館の核コレクションである「本山考古資料」へと引き継がれたものである。

「昭和7年10月1日 浜寺農業博物館内の本山考古室を見る 陳列品中の田沢氏旧蔵大社村

柏堂。越木岩下新田。越水丘陵。甲東村甲山東 麓良元村宝塚ウイヤマ。発見の石鏃其の他あり

特に目立ちたるものをスケッチす と記して、 大社村越木岩下新田の石鏃、大社村柏堂の石鏃、 良元村宝塚ウイヤマの石庖丁(?)をスケッチ している、いずれも1/1とある。このうち、 越木岩下新田出土石鏃が、現在の関西大学博物 館に伝蔵されており、紅野芳雄のスケッチした 石鏃と同定することができる。陳列はどのよう な状況であったのかはわからないが、一目で同 定できるほど石器の特徴を捉えており、独学で はあったろうが、石器の特徴を抽象化して捉え ることができる程度に、遺物の観察とスケッチ の技量を有している。また、文中の田沢氏は、 田澤金吾氏のことで、辰馬悦蔵氏や氏を通じて 梅原末治氏との交流があり、梅原氏の『銅鐸の 研究』に資料を提供したり、田澤氏の採集した 遺物の多くが現京都大学総合博物館に伝蔵され たりしている。

紅野芳雄ら当時の好古家は、田澤金吾氏ら同好家や古物商との間で、石器や土器、埴輪の交換、売買をよく行っており、「考古小録」にもその記録が見える。

この本山考古室の石鏃と紅野芳雄のスケッチが残された「考古小録」第3冊は、平成10年に開催された西宮市立郷土資料館第13回特別展示において同じ展示ケースに並べられ、実に66年ぶりの再開を果たした。

「考古小録」に記された紅野芳雄と本山考古室の接触や田澤金吾氏との度重なる交友は、大正から昭和初期における「考古」あるいは「好古」のありかたをリアルに伝えてくれている。

なお、「考古小録及び関係品」は、平成10年 の西宮市立郷土資料館特別展示ののち、紅野芳 雄のご遺族より一括して西宮市立郷土資料館に 寄贈された。

#### 参考文献

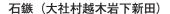
末永雅雄編 1935年『本山考古室要録』

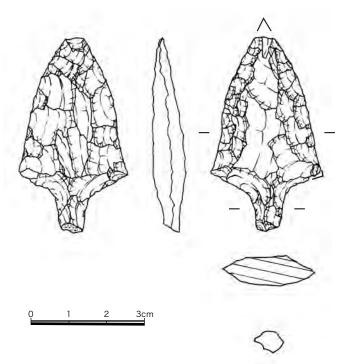
紅野芳雄 1940年『考古小録』

合田茂伸 1998年『紅野芳雄「考古小録」〜西宮考古学の パイオニア〜西宮市立郷土資料館第13回特別展示案内図録 〜』(西宮市立郷土資料館)

森下真企 2017年『西宮市指定重要有形文化財〈考古資料〉 「考古小録」及び関係品調査報告書』(西宮市文化財資料第 64号)







石鏃実測図 (実測・トレース:渡邊貴亮氏)

関西大学非常勤講師 西宮市立郷土資料館 館長

## 三島ウドの栽培方法

### 吉 野 なつこ

ウドとは、春を告げる山菜の一種であり、芽や茎、若葉を食用とする。シャキシャキとした歯ごたえと独特の風味があり、皮を剥いて細切りにしたものの酢味噌合えや、穂先の天ぷらなどで親しまれているが、その成長した姿を知っている方は少ないのではないだろうか。体ばかり大きいが役に立たないことのたとえである「ウドの大木」ということわざで知られているが、実は木ではない。ウコギ科タラノキ属の多年草であり、成長しても高さは1~2mほどである。

ウドは、セリやフキ、ミツバなどともに数少ない日本原産の野菜である。中世には、主に野生のものを薬用として用いていたが、近世に商品作物として田畑で栽培されるようになった。

このように古くから利用されてきたウドであるが、その栽培方法は一般の野菜とは大きく異なっている。また、地域によって栽培方法が異なることも特徴である。近世からウドを栽培していた地として、東京都武蔵野市吉祥寺、杉並区松庵、京都府京都市伏見区六地蔵、大阪府茨木市などが挙げられるが、本稿では現在も伝統的な栽培方法を継続している大阪府茨木市のウドの栽培方法を紹介したい。

茨木市で栽培されているウドは、大阪府北東部の旧郡名「三島」を冠した「三島ウド」と呼ばれ、なにわの伝統野菜に指定されている(写真1)。現在三島ウドの栽培、出荷を行う農家は

茨木市千提寺地区の1軒だけであるが、かつて は何軒もの農家があり、関西で屈指のウドの生 産量を誇っていた。

その栽培の歴史は江戸時代まで遡る。西国街道の郡山宿本陣に伝わる『宿帳』の明和9(1772)年3月13日条に、本陣の当主が宿泊した大名にウドを献上したことが記されている。それ以降もたびたび春先の記事には宿泊した大名にウドを献上する記述があり、ウドが高級品であったこと、当時から郡山宿近辺で栽培されていたことがわかる。

4月から12月まで、ウドは畑で育てられ、特 に世話を必要としない。ウドは、冬になって気 温が下がると、根株に栄養を蓄えるため葉を落 として休眠する性質を持つ。ウドが休眠後は、 茎を切り落とし、ウドの根株を土から掘り起こ す。起こした根株は、ウド小屋と呼ばれる藁で 葺いた大型の小屋の中に密植する(写真2,3)。 現在はビニールハウスを利用し、前後だけを藁 で葺いた形に変わっている。密植したウドの根 株の上に、干し草と藁を濡らしたものを交互に 層になるように重ねていく。用いる干し草は、 春から夏に田の周辺で刈りとった雑草を、あら かじめ干しておいたものである。さらに上部に ソクワラと呼ばれる藁束を敷き詰め、重しの石 を乗せる。濡らした干し草と藁は発酵し、次第 に熱を持っていく。



写真1 三島ウド



写真2 ウド小屋(北川周一氏提供)



写真3 藁で葺かれたウド小屋内部 (北川周一氏提供)



写真4 ワラと干し草を押し上げて成長するウド

三島ウドの最大の特徴は、この発酵熱とウド 小屋の保温性を利用し、ウドに春が来たと勘違いさせて通常よりも早く発芽させることにある。最初は一気に30度程度まで温度を上昇させ、ウドを休眠から目覚めさせる。干し草の発酵は約2週間で終わるが、今度は目覚めたウドが成長のため熱を発する。このとき温度が20度から25度になるよう、上に敷き詰めたソクワラの間隔によって調整する。温度が低ければウドは成長せず、また温度が上がりすぎれば株が腐るため、安定するまで気を抜くことができない。

干し草には、田植え前に採取する春草と田植え後に収穫する夏草がある。春草は柔らかく、熱が上がりやすいが、夏草は成長していて硬いため温度が上がりにくい。この二種類の干し草を冬の平均気温を予想して調整し、均一に熱が



写真5 収穫の様子 (茨木市提供)

かかるようにする。これらの細かな温度管理は 経験知に基づくもので、大変難しい職人技であ る。

ウドは干し草と藁を押し上げて成長する。日に当たらないため、白く軟らかくてアクが少ないものに育つ。しかし、収穫時までその姿を見ることができないため、干し草と藁の持ち上がり具合から成長を判断する(写真4)。40日~50日かけて60cm程に成長すると、ウドキリと呼ばれる専用の道具で一本一本根元を切って出荷する(写真5)。収穫期は2月中頃から3月の初旬で、出荷が終わると根株を掘り起こし、切断して分けたあと、再び畑に植えつける。

このような栽培方法は、江戸時代後期には行われていたことが指摘されている。発酵熱による温度の調整技法は、一朝一夕に行えるものではなく長年の経験を必要とする。こうした技術は江戸時代からの試行錯誤の結果に基づいた結晶であり、時代を超えて伝承された貴重な民俗技術である。

最後になりましたが、調査に協力していただきました、北川周一氏、後藤一雄氏、千提寺ファーム中井大介氏に心から御礼申し上げます。

#### 【参考文献】

茨木市史編さん委員会『新修茨木市史』第2巻、茨木市、 2016年

茨木市史編さん委員会『新修茨木市史』第3巻、茨木市、 2016年

丸山雍成 監修、梶洸·福留照尚編『山崎通郡山宿椿之本 陣宿帳:元禄9年~明治3年』向陽書房、2000年

関西大学大学院博士課程後期課程単位取得

## 遠山慶一氏寄贈の「遠山甚二郎旗指物」について

### 上 原 康 生

本稿では、平成22年度に本学校友の遠山慶一氏より当館に寄贈された「遠山甚二郎旗指物」(【写真①】)を紹介する。寄贈者の遠山慶一氏は、伊予松山藩に8代にわたって用人として仕えた遠山家の末裔であり、これまで度々当館に資料をご寄贈頂いているが、本資料は旗指物1流で、赤地に金箔文字を刺繍して「遠山ちん二郎(じんじろう、甚二郎の意)」と記されている。法量は、縦101.3cm、幅66.7cmである。



【写真①】遠山慶一氏寄贈「遠山甚二郎旗指物」

旗指物とは、戦国~織豊期にかけて、大名の 軍勢が敵味方を見分け、また武功を記録するために背面に指した目印旗であり、戦国期に戦争 が大規模化、集団戦化するとともに発展した。 形状としては、正方形の四方や、縦3、横2の 割合の大きさの四半が多く用いられ、本資料は 四半に該当する。本資料の所用者である遠山甚 二郎の仕えた井伊家は、「井伊の赤備え」として知られているように、藩主をはじめとして士卒に至るまで、武具や旗指物などを朱色で統一していた。一般に旗指物には、家紋、神仏の名号やその略号、霊獣・霊鳥、瑞祥文、動植物文、格言、使用者の姓名などが記され、そのうち、姓名を記したものには、同姓一族を見分けるために通称やあだ名をひらがなで記したものがある。井伊家の場合、赤備えの軍備はデザインや力法が細かく規定されており、遠山甚二郎のような騎馬武者(知行取藩士)の旗指物は、朱地に金でそれぞれの名を記すのを基本形としていた。なお、本資料に類似するものが井伊家の居城であった彦根城博物館に収蔵されている。

所用者の遠山甚二郎は、元和元年(1615)の 大坂夏の陣において活躍したことが史料から確 認できるが、その前に、遠山甚二郎および寄贈 者の遠山慶一氏の祖先に当たる美濃遠山氏につ いて触れておきたい。

遠山氏の祖とされるのは、鎌倉前期に幕府の 御家人として活躍した加藤次景廉である。景廉 は源頼朝から美濃国遠山荘(現岐阜県恵那市・ 中津川市等周辺)地頭職を拝領した。遠山氏は、 その子景朝がこれを相続して同荘に住し、遠山 を称したことに始まる。その後、同氏は、景朝 の嫡男景村の恵北家(苗木氏)、二男景重の明 知家、三男景員の岩村家に分流するが、そのう ち、恵那郡南半の南部を所領としたと推定され ている明知家が宗家になると考えられている。 なお、寄贈者や遠山甚二郎はこの明知家の系統 であることが寄贈者宅に伝わる系図(以下、「系 図」と記載)から確認できる。

その後、戦国期に明知遠山氏は織田信長の麾下に入り、子孫は江戸時代には旗本となって明治期まで存続している。「系図」によると、寄贈者や遠山甚二郎の祖先に当たるのが明知家12代景行の弟景恒である。景恒は信長の手に属して桶狭間の戦いで功を上げるなどしたが、後年同吏と争論におよんで同吏を討ち、関東に退い

たという。その後、景恒の子景運が天正年間 (1573~1592) に下総国小南 (現千葉県香取郡 東庄町) において松平 (久松) 定勝に仕え、伊 勢国桑名に所領を拝領した。そして、景運の子 が遠山甚二郎、および寄贈者の先祖である伊予 松山藩士景利である。

次に、遠山甚二郎およびその子孫について述 べる。

遠山甚二郎は、徳川家の重臣で彦根藩初代藩 主の井伊直政に仕え、慶長12年(1607)付の井 伊家中の分限帳に、知行高150石の者として「遠 山甚次郎」の名が確認できる(「未之年御家中 分限帳」(『井伊年譜』(『新修彦根市史 第6巻 史料編 近世1』2002年)))。先述したように、 甚二郎は大坂夏の陣で活躍したことが確認でき る。

大坂夏の陣の戦いの一つである元和元年5月6日の若江合戦において、甚二郎の仕える井伊直孝の部隊は、木村重成隊を破り、敵将木村重成を含む300余の者を討ち取る功を上げたとされる。この功により、大坂の陣後、井伊家は元和元年、同3年(1617)、同10年(1624)に各5万石ずつ加増され、譜代大名の中で最大となる30万石を領有するに至った。このように、若江合戦は井伊家飛躍のきっかけとなった戦いと言える。この戦いに参陣した甚二郎は、井伊隊の先手を務めた川手主水の組に属し、主水を討った平塚熊之助を討ち取る功を上げたが、甚二郎自身もこの戦いで討死している(『大坂御陣覚書』(『大日本史料』第12編第18冊1055、1056、1059頁))。

『井伊家文書』内に、大坂の陣の戦死者のうち、 慶安3年(1650)12月8日段階で井伊家中に子 孫がなく断絶した者たちが記されており、その 中に「遠山甚次郎」の名が見える。そして、そ の跡は「子甚二郎」が相続したが、彼の病死後 子がなく、断絶したとある(『井伊家文書』(『大 日本史料』第12編第18冊964、965頁))。しかし、 「系図」によると、甚二郎討死後、実際にはそ の弟(甚二郎。景運四男)が養子となって跡を 相続したようである。具体的な時期は不詳だが、 甚二郎(景運四男)は実父景運より先に亡くな ったらしい。「系図」によると、景運が亡くな ったのは寛永12年(1635)4月11日のことであ るので、これに従うと、これ以前に甚二郎は病 没したことになる。なお、「系図」によると、 甚二郎(景運四男)には娘がおり、父の病没後 に伊予国松山に移り、親類である遠山新八景利 の家に寄寓し、そのまま嫁がずに同家で没した らしい。このような関係から寄贈者の家に本資 料が伝わることとなったのである。

以上の経緯から明らかなように、本資料は織豊~近世初期に活躍した武将の装備品として象徴的な品物である。当館では、寄贈時に見られた断裂と劣化部分を裏打ちし、展示に耐える修理を行った。今後、博物館で展示公開をしていきたい。

最後になりましたが、本資料をご寄贈頂き、 また、「系図」等の資料についてもご教示を頂 いた遠山慶一氏に心から御礼を申し上げます。

#### 〈主な参考文献〉

網野善彦「加藤遠山系図について」(小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館 1991年)

加藤鐵雄『戦国武将「旗指物」大鑑』えにし書房 2016年 『国史大辞典 第6巻(こま~しと)』吉川弘文館 1985年、「指物」の項目

サントリー美術館編『井伊家伝来の名宝 近世大名の文と武』サントリー美術館 1999年

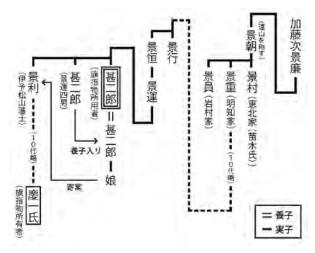
竹村直美「研究ノート 若江合戦図について」(『彦根城博 物館研究紀要』第1号1988年)

『枚岡市史 第1巻 本編』1967年

彦根城博物館編『"ほんもの" との出会い 井伊家伝来の名 宝1「井伊家と彦根藩」』彦根城博物館 2009年

彦根城博物館編『"ほんもの" との出会い 井伊家伝来の名 宝 2 「武器と武具」』彦根城博物館 2009年

横山住雄『中世美濃遠山氏とその一族』岩田書院 2017年



【参考図①】遠山氏略系図 ([横山 2017年] 及び「系図」を基に作成)

関西大学博物館学芸員

## ☑ 博物館だより

- ◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修(9月23日)、山内紀嗣氏による拓本研修(9月26日)と、佃 一輝氏・佃 梓央氏による煎茶研修(10月5日)を実施し、合わせて70名の方の参加を得ました。
- ◇2017年度ミュージアム講座「発掘最前線 考古学者は遺跡や古墳を発掘する」を3回にわたり関西大学千里山 キャンパス尚文館にて開講し、141名の方から聴講の申込みをいただきました。

第1回 10月7日「縄文時代の遺跡を発掘する―九州の火山灰の下に埋まった遺跡―」

関西大学博物館学芸員 山下大輔

第2回 10月14日「古墳時代の遺跡を発掘する―記紀にみられる王宮をさがして―」 関西大学文学部准教授 井上主税

第3回 10月21日「飛鳥時代の古墳を発掘する—『日本書紀』を掘る—」 明日香村教育委員会文化財課調整員 関西大学文学部非常勤講師 西光慎治

◇11月12日から17日まで博物館実習展を開催しました。今年度は51名の実習生が「イノシシと共に生きる人々一篠山を舞台に─」、「なにわの観光 お伊勢参りから名所巡りへ」、「今日に生きる安倍晴明 古より語り継がれる姿」、「浮世絵─大阪の名所展─」の4班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。会期中には539名の方に来場いただきました。



◇2017年度冬季テーマ展として、2018年1月15日から2月15日まで「関西大学と村野藤吾設計図・建築写真・絵画」を、冬季ミニテーマ展として「本山コレクションからみる日本列島の石器とその石材」と「『津田秀夫文庫』調査速報展〜近世摂河の村々の支配と暮らし〜」を同時開催しました。期間中409名の方にご覧いただきました。







◇本年度下半期、上杉康彦氏より本山彦一遺愛のがまぐち1点、亘 甫氏から細江逸記氏遺愛の英国風書斎机1 台、校友遠山慶一氏から煎茶道具一式、煙草箱、明治期新聞雑誌、本居宣長の「てにをは紐鏡 再板」の合計 13点、校友の刀匠河内國平氏から氏が作刀された短刀1本、さらに髙倉春菜氏を介してご尊父故大石正雄氏 が蒐集された琵琶湖竹生島湖底採集の弥生時代小型壺形土器1点を寄贈いただきました。今後、博物館で充 分活用していきたいと考えています。

## ・・・編集後記・・・

表紙は、今年の干支である戌にちなんで、本館所蔵の木彫りの「土佐闘犬」です。顔つきと立派なまわしは闘犬の雰囲気ですが、頭の大きさやしっぱの表現など全体的にはデフォルメされた愛嬌のある作品です。地元高知県で民芸品として作られたものです。

2018年度春季企画展「山本竟山の書と学問―湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク―」を4月1日から5月20日まで開催します。また、7月2日から8月5日まで夏季企画展として「神戸市立博物館選―地図皿にみる世界と日本―」を開催します。

